

# 2024年文学部フォーラム「石牟礼道子再検証」 報告・印象記

五島 慶一・吉田 祐紀乃・江崎 萌・中村 勸太

2024年も押し詰まった12月22日（日）、本学中ホールにて文学部フォーラム「石牟礼道子再検証」を次頁プログラムの通りに行った。入場記録に拠れば学生75名、一般が教員職員含めて110名の参加があったとのことである。後述するメディア関係者、遅れて来て受付を通っていない方などを含めると総勢聴衆200名に迫る盛況だったかと思われる。更に熊本日日新聞社（熊日）・NHK熊本・TKUのそれぞれ取材があった。NHKではその宵のニュースで簡単に採り上げられ、熊日ではその夜配信の電子版及び翌日の紙面に内容を過不足なく紹介する記事が載った。TKUでも年明けに扱われるとのことであった。

冒頭の学部長挨拶に続いて司会の五島からの企画全体の趣旨説明があり、第一部ではゲスト二名による講演と学生二名による発表がそれぞれ行われた。第二部はゲスト登壇者二名の対談。講演後の休憩時間中に聴衆から寄せられた質問への応答を主に、そこからの発展で自由に語っていただいた。最後に進行役の五島から閉めの言葉、来場者を含む総員での「石牟礼道子再検証」継続を誓言・依頼する形で会の「開かれた終わり」とした。次々頁に掲げたタイトル図は、開会前や休憩時間中に壇上のスクリーンに投影していたもの。12月8日に行ったフィールドワーク（後掲資料参照）で撮影した写真などを素材に、吉田・江崎の学生二名にアレンジしてもらった。

以下では、当日の内容をいま少し詳しく伝えるべく、三部に分けて構成する。初めに掲げるのは本フォーラムの企画から当日の進行役までを務めた五島が準備し、会場で配布した資料である（〔当日配布資料 五島〕）。企画発想の趣意をそこに籠めたつもりである。尚、【プログラムとタイムテーブル】の記載は既に紹介したところと重複するので省略したほか、縦書きだった後半部を横書きにして、それに応じて一部表記を改変するなどの再編集を行っている。

次には学生発表の部で各発表者が作成・実際に使用されたスライドをそのまま、二人分掲載する。これによりその発表内容をある程度捉えることができると思われる。

最後にフォーラム全体を振り返っての印象・報告記を、五島ゼミ所属すなわち近代文学を専攻する博士前期課程の院生である中村君に執筆してもらった。彼は五島の（資料でも紹介する）今年度行った石牟礼関係授業に対して、発表も行った学部生の吉田さんと並んで最も積極的に参加してくれた学生の一人であり、この役には最適任と考えられた故である。

尚、イベント開催に当たっては本学文学部嘱託助手のお二人、特に日文資料室附の泉さんには準備段階の細々したことから当日の設営・撤収に至るまで大変行き届いた配慮を戴き、非常に御世話になった。記して謝意を表したい。（五島）

【プログラム】

司会：五島 慶一（本学文学部日本語日本文学科准教授）

開会挨拶 村尾 治彦（本学文学部長・教授）

〔第一部〕 講演・ミニ発表

伊藤 比呂美氏（詩人）による御講演「石牟礼道子の「詩」」

渡邊 英理氏（大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻教授）による御講演  
「『椿の海の記』の世界——石牟礼道子と森崎和江を結びつつ」



（講演する伊藤氏）



（同じく渡邊氏）

吉田 祐紀乃さん（本学文学部日本語日本文学科学生）による発表

「石牟礼道子「十六夜橋」—「生まれ替わり」の物語におけるお小夜」

江崎 萌さん（本学文学部日本語日本文学科学生）による発表

「(新作能)「不知火」」

〔第二部〕 対談 渡邊氏×伊藤氏

（進行 五島）



（閉会）



〔当日配布資料 五島〕

文学部フォーラム「石牟礼道子再検証」

【趣意】

熊本県立大学文学部では、これまでその研究や教育の成果の一端を地域社会をはじめ外部へと発信し、同時に学生らに研究の面白さ・重要性を周知すべく、毎年度テーマを定めて学術フォーラムを開催してきた。

今年度は水俣出身の詩人・作家である石牟礼道子をテーマに据えてこれを行う。石牟礼作「苦海浄土」は広く——あるいは「世界文学」として（池澤夏樹ほか）知られるが、彼女の文学活動の始発点は短歌そして詩であった。そしてその後においては、詩的情緒を多分に含みながらも散文的結構を持った小説として成立している長短編作品や「苦海浄土」同様に独特の〈聞き書き・再話（的）形式〉のもとで日本の近代化と民衆精神の行方を占った「西南役伝説」のような一風変わった作品、更には新作能「不知火」に至るまで、その活動と遺された作品群は傾向・量ともに多岐に亘っている。

作家は作品によって〈作家〉になる。その意味では石牟礼道子という〈作家〉は、実際にはその名と「苦海浄土」が持つイメージほどには一般に知られていないということもできるのではないか。そして、そのことは彼女の出身地で終の住処でもある、ここ熊本にあっても同様であろう。今回はそんな〈作家〉石牟礼道子を少しでも知ってもら<sup>よすが</sup>う縁とすべく、ここにその「再検証」を掲げてフォーラムを開催する。

【プログラムとタイムテーブル】（→省略）

◎ 登壇者・司会紹介

○ 伊藤比呂美 (いとう・ひろみ)

1955年東京生まれ。1978年に詩集「草木の空」でデビュー、著書多数。2007年に石牟礼道子との共著『死を想う われらも終には仏なり』。2014年から石牟礼大学「いま石牟礼道子を読む」を熊本文学隊の仲間と企画運営、司会を務める。近著に『とげ抜き 新巣鴨地蔵縁起』『道行きや』『森林通信』他。西日本新聞で25年にわたって人生相談をやっている。2018年に長年のカリフォルニア生活を引き上げ、帰熊。

☆ 石牟礼道子・伊藤比呂美『新版 死を想う—われらも終には仏なり』(2018年7月、平凡社新書)

※ 対談記録。「石牟礼文学の入門書としても最適な1冊」(同書帯より)

○ 渡邊英理 (わたなべ・えり)

大阪大学大学院教授、日本語文学・批評。熊本県生まれ、鹿児島県育ち。東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学、博士(2012年)。

単著『中上健次論』(インスクリプト、2022、第14回表象文化論学会賞、石牟礼道子と中上健次の比較を含む)、共編著『クリティカル・ワード 文学理論』(三原芳秋・鶴戸聡と共編、フィルムアート社、2020)。『文學界』新人小説月評(2023年8月号～2024年7月号)連載。現在、共同通信・文芸時評「いま、文学の場所へ」(2023年4月～)を月一連載、提携各紙に配信中で、『熊本日日新聞』にも掲載中。

[近年の御業績から]

- ・森崎和江『能登早春紀行』(中公文庫、2025年1月刊行)解説「旅する言葉、海と女の思想圏」
- ・「森崎和江を読み、書く。「森崎和江 終わりのない旅」をめぐって。」(森崎和江さん三回忌・森崎和江 終わりのない旅 於 西南学院大学 2024年6月29日)
- ・基調講演「連なり越えゆくものを感じする—石牟礼道子の「脱近代」」(シンポジウム「モダニズムの水平線—世界文学シンポジウム」 於 立命館大学衣笠キャンパス 2024年3月5日)
- ・「道を「仮設」する：石牟礼道子『椿の海の記』の世界」『日本文学』2023年2月

○ 吉田祐紀乃 (よしだ・ゆきの) 熊本県立大学文学部日本語日本文学科四年生。卒論テーマは、三島由紀夫(初期小説)「春子」(五島ゼミ)

○ 江崎萌 (えさき・もえ) 熊本県立大学文学部日本語日本文学科四年生。卒論テーマは、『東京朝日新聞』記事における松井須磨子像(羽鳥ゼミ)

○ 五島慶一 (ごとう・けいいち)

熊本県立大学准教授。1972年東京生まれ。東京・埼玉の私立高校教員(非常勤→

専任)を経て2010年4月から現職。専門は芥川龍之介を中心とする日本近代文学。

ゼミでは近代(明治)以降現代作家まで、学生の自由選択に任せて卒業論文指導をしている。赴任二年目から十名内外の卒論提出者を持つ(初年度は五名)が、これまで石牟礼を扱った者は皆無。韻文を扱う者も僅かで、記憶に拠れば数年前に中原中也作品を扱った例があるのが唯一。宮澤賢治は毎年誰かが扱う「人気コンテンツ」だが、それらも専ら童話作品であり、詩をメイン素材として扱った事例はない。

近著:「芥川龍之介と『サンデー毎日』:菊池寛を補助線に」→副田賢二ほか編『戦前期週刊誌の文学と視覚表象:『サンデー毎日』の表現戦略』(2024年11月、文学通信)に収録。同書には渡邊氏も「週刊誌メディアと中上健次—『朝日ジャーナル』と『週刊朝日』を中心に」を寄稿。

## ◎ 初めに

まず、石牟礼道子を『苦海浄土』の作者という身分から救い出さなければならない。

一般に作家はその生涯にいくつかの傾向に沿って数十の作品を残す。

(中略)

しかし石牟礼道子にあっては『苦海浄土』の印象があまりに強い。

実際、彼女はこの一二〇〇枚という長大な作品を四十年間に亘<sup>わた</sup>って書き継ぎ、これによって作家としての評価を得た。傑作であると同時に社会性を帯びた問題作であって、もっぱらそちら側から多くの読者を持った。ぼくがこの「日本文学全集」に先立って編んだ「世界文学全集」の一卷(引用注:Ⅲ-04『苦海浄土 石牟礼道子』[二〇一一年一月、河出書房新社])にこれを収めたのも、これなくして日本の戦後文学は完成しないし、また言うまでもなくこれが石牟礼道子の代表作だからである。

しかし、それにしても『苦海浄土』はあまりに大きくて複雑な、構成要素も多岐に亘る、特異な作品である。その規模のために彼女がこれを書くに至った道筋や、並行して書いた他のもの、なかんずく『苦海浄土』を裏側から支えていたこの人の資質などが却<sup>かえ</sup>って見えにくくなっている。これを読み終えて首尾よく彼女のよき読者となった者は次は何を読めばいいのか、あるいは他のもう少し与<sup>くみ</sup>しやすいものから入って『苦海浄土』に赴こうとする者はまず何を手に取るべきか。

そのためのぼくなりセレクションがこの一卷である。どちらを先に読んでもいいが、この巻と『苦海浄土』でこの人が書いてきたもののおおよその幅と奥行きがわかるだろう。

(池澤夏樹編『日本文学全集24 石牟礼道子』[二〇一五年一〇月、河出書房新社]解説)

文学部、特に日本語日本文学科の研究領域・立場からする石牟礼道子検証のあり方

- 1 「苦海浄土」とその作者として
- 2 それ以外の作品の作者として

- 3 各作品それ自体（内的〈世界〉や作品を構成する力学について）の検証  
→文学研究に所謂「作品論」から、場合によりテキスト論として（普段の、五島による研究実践）

☆ 1～3それぞれ、また横断的な研究が「再検証」のためには求められる。

### 五島による今年度・石牟礼関係授業の記録

〔前期〕 大学院授業「日本文学特殊講義Ⅳ—1」

受講者：大学院生三名 + 「早期履修制度」を利用した学部生一名（吉田さん）

※ 「早期履修制度」

大学院進学を考える学部生が院生と共に（公式に）授業を受けられるという本学の制度。学部・学科（研究科・専攻）によっては入学後の大学院単位として認めているところもある。

基本、演習形式。扱った作品とその書誌は次の通り

- ・「**苦海浄土 わが水俣病**」後に三部作とされるうちの第一部。一九六九年一月、講談社より刊行。原型とされる「海の空のあいだに」は一九六五年一二月～翌年八月に『熊本風土記』に連載。更に一九六〇年一月に「ルポルタージュ」として『サークル村』に発表された「奇病」もその源流性が指摘される。
- ・「**西南役伝説**」一九六二年～一九七六年に『思想の科学』『暗河（くらごう）』などの各種媒体に書き継がれ発表されたものを一九八〇年に同題で一書として刊行（朝日新聞社、九月）。一九八八年一月に加筆改訂版を朝日選書（同社）として出版。今回は全集を底本とする講談社文芸文庫（二〇一八年三月）を利用。
- ・「**七夕**」（一九九一年十一月『群像』）と「**赤い夕陽**」（一九九九年一〇月『群像』）  
→同一のモチーフが利用された短編小説
- ・『**無常の使い**』（二〇一七年三月、藤原書店）→石牟礼が様々な媒体に書いた追悼文集

〔後期〕 学部授業「複合演習Ⅱ」

受講者：四年生二名！（江崎さん・吉田さん）

対象作：本日ミニ発表のもの

教室での通常演習授業以外に、以下（次頁）を特別編として実施。

- ・一〇月三十一日 浅野麗氏（亜細亜大学経営学部准教授：専門は石牟礼のほか中上健次など）特別授業「石牟礼道子の〈みやこ〉」（全学生へ公開実施）

受講者：江崎さん・吉田さん・前期「日本文学特殊講義Ⅳ－1」参加の大学院生、他に学部生数名

概要：石牟礼の作品、特に「苦海浄土」について、渡辺京二がそこに「うたおうとする根強い傾向」（「石牟礼道子の世界」講談社文庫『苦海浄土』〔一九七二→二〇〇四年新装版〕解説）があることを強調しその〈文学〉的表現性を言揚げしたが、そうした創作営為によって石牟礼（作品）は「〈水俣以前〉の水俣」を（実態を越えて）「聖化」・美化してしまったという谷川雁による批判（「〈非水銀性〉水俣病・一号患者の死」『極楽ですか』〔集英社、一九九二〕）、更にそこに天皇・皇后という存在が結びつくことで絶対化あるいは〈聖別〉されていくという綿野恵太による論及（「石牟礼道子と憐みの天皇制」『子午線』vol.6 二〇一八）を紹介し、それらについて文学研究（者）の立場から、主に「苦海浄土」第三部「第三章 鳩」を素材として改めての検証を試みたもの。

（参考：同氏「無形の言葉」を綴ること―石牟礼道子「苦海浄土 第三部 鳩」をめぐって」『三田文学』二〇一五年秋号）

- ・一二月三日 新作能「不知火」DVD鑑賞会（全学生へ公開実施、しかし……）

参加者：五島以外三名！（江崎さん・吉田さん・大学院生一名）

※ 空き教室にてDVD（二〇〇二年の東京公演を収録したもの）を放映。

さしより観るだけの会

- ・一二月八日 水俣フィールドワーク（一日バス旅行）

前期大学院・後期学部授業受講者と五島の計六名で以下を巡った。

- ・**カライモボックス** 熊本県水俣市にある古書店。店舗はかつて石牟礼の書斎だった一室。一九八六年に建てられた石牟礼道子・弘夫妻旧宅の一部。「石牟礼文学に惹かれて2009年に故郷の京都で開店しましたが、2023年4月に閉店。11月に現店舗に移転、再オープンしました。」（同店発行フリーペーパー『唐芋通信』第二二号〔二〇二四年七月二八日〕から抜粋）※ タイトルスライド右下の写真

店主の奥田さんから水俣に伝わる生前の石牟礼の印象、熊本県内でも水俣と熊本市部（及び福岡など更なる大都市圏）との間で、石牟礼道子という存在の扱われ方に大きな落差があるということや「よそもん」（『唐芋通信』第二二号掲載「水俣大橋」より）として水俣に暮らす方の実感として伺い、大いに感慨を受けた。また同店にて偶然（？）『暗河』の編集に関わった前山光則氏にもお会いできた！

- ・**エコパークみなまた親水緑地**→学生と「不知火」水俣公演跡地を探す

※ 同スライド左写真

- ・**水俣病資料館** ・**百間排水口**

[学生発表]

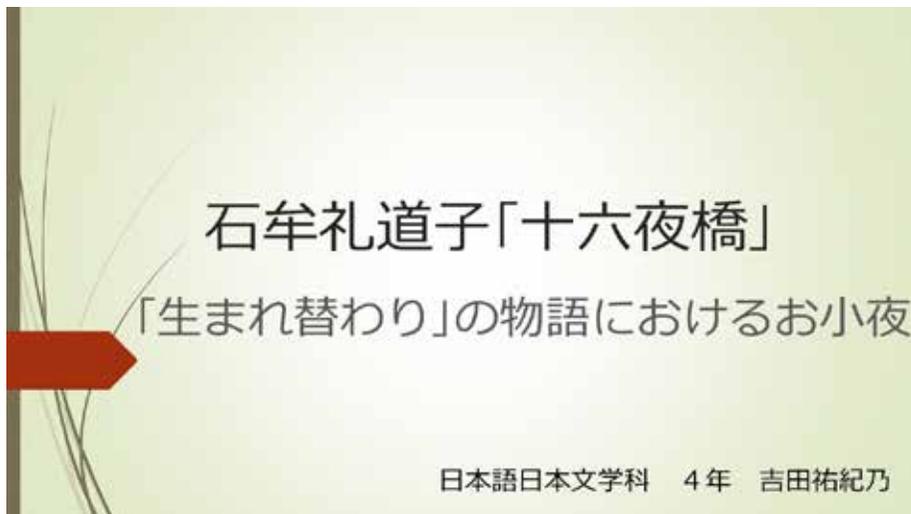


(発表する吉田さん)



(同じく江崎さん)

[学生発表① 吉田さんの当日投影スライド]



## 1. 「十六夜橋」について

1982年～1984年『いま、人間として』  
1985年～1988年『こみち通信』

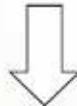
6年間にわたり、2種類の雑誌に発表

第3回紫式部文学賞！

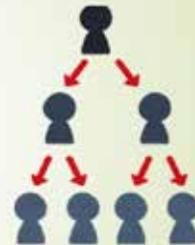


## 2. 先行研究

■ 米本浩二  
同じような生の形が「無限ループ」



「生まれ替わり」とされる登場人物



## 3. 高原家の女たち



お糸

望まぬ結婚  
19歳で恋人と心中



志乃

お糸の「生まれ替わり」  
心の病 機織りの名人



綾

「志乃のうたう素質  
を受け継いでいる」

### 3. 高原家の女たち

- 「高原家の血筋の女たちは、人遠い気質がある」
- 似た性質を持つこと = 〈生まれ替わり性〉  
**血筋**の問題として語られる

### 4. お小夜の位置付け

#### 章題

- 第一章 梨の墓
- 第二章 ほおずき灯籠
- 第三章 十六夜橋
- 第四章 みずな
- 第五章 櫛人形
- 第六章 雪笛

お小夜 → 高原家の血筋ではない

お小夜の特異性

→ 1つだけ人名  
※お小夜の源氏名

### 4. お小夜の位置付け

身売り

落籍

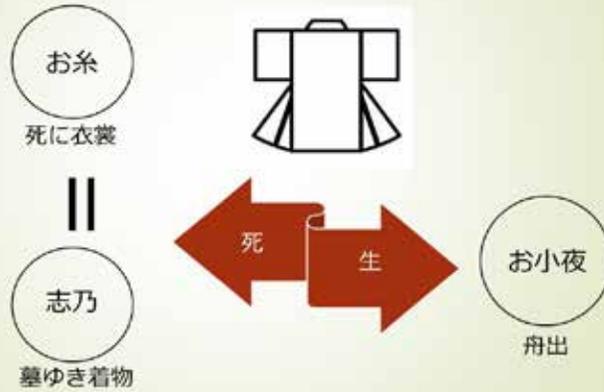
道行



志乃

お糸

#### 4. お小夜の位置付け



#### 5. まとめ

- 「生まれ替わり」の物語  
主に高原家の女たちによって構成 **血筋**
- 特異性を持つお小夜 **非血縁**
  - 〈お糸—志乃—お小夜〉という系図
  - 白い着物の表象
    - 死に向かわないお小夜 → 系図から外れる
    - 高原家の女たちに接近しつつ離れていくあり方

ご静聴ありがとうございました

# 新才能『不知火』

文学部日本語日本文学科4年 江崎萌

## 【書誌情報】

・新才能『不知火』オリジナル版（原作）

→『不知火』藤原書店、2004年2月

※原作は、2003年8月に平凡社から発行された  
石牟礼道子『新才能 不知火』にも掲載あり

・『不知火』上演詞章（台本）

→橋の会第69回公演パンフレット、2002年7月

## 【上演記録】

- ・初演 ……2002年7月14日、宝生能楽堂  
(東京都文京区)
- ・東京公演 ……2002年7月18日、国立能楽堂  
(東京都渋谷区)
- ・熊本公演 ……2003年10月28日、熊本県立劇場
- ・水俣公演 ……2004年8月28日、水俣市百間埋立護岸  
(エコパークみなまた親水緑地)
- ・再演 ……2004年10月4日、オーチャードホール  
(東京都渋谷区)

## 【上演団体】

- ・日本能楽芸術振興会「橋の会」

## 【出演・スタッフ】

- ・不知火.....梅若六郎
- ・隠亡の尉.....櫻間金記
- ・常若.....梅若晋矢
- ・夔(き) .....観世鏡之丞
- ・演出.....笠井賢一
- ・大鼓.....亀井忠

ほか

## 【あらすじ】

- ・時は八朔の夜、舞台は恋路が浜
- ・姉弟（不知火と常若）が使命を果たす → 身体に毒が回る
- ・隠亡の尉（菩薩）→ 姉弟を呼び出し再会させる
- ・姉弟は来世に夫婦として生まれ変わる
- ※ 「毒を作り出した人間が、反省して生き直す力があるのならば」
- ・菩薩→ 歌舞音曲を司る中国の神・夔を呼び出して祝う
- ・夔→ 百獣や水銀で狂い死にした猫たちを呼び出し舞い上らせる



・恋路が浜のモデルになった恋路島  
(親水護岸より、2024年12月8日撮影)

## 【原作と上演台本の違い①】

演出の笠井賢一によると.....

- ▶ 石牟礼道子を書いた能本は上演するには長すぎるため、大幅に刈り込んだ台本にする必要があった
- ▶ そのため、能本を四分の三まで削りつつ、作品の本質や力強さを失わないように努めた

笠井賢一「能との出会い直演出ノート」より  
(石牟礼道子『新作能 不知火』、平凡社、2003年)

## 【原作と上演台本の違い②】

- ・原作と上演台本には、約60箇所の異同が見られる。
- ・語尾の違いや言葉の繰り返しの有無のほか、数行にわたって省略された箇所もある。

(異同例)

原作：海霊とは生類の親にしておのづから華やぐものゆゑに  
世にも貴なる魂といふなり。



台本：海霊とは生類の親にしておのづから華やぐものゆゑに  
海より生ずる幽火をいふなり。

## 【原作と上演台本の違い③】

大きく変更が加えられている点は、以下の3点である

### ①竜神が一切舞台上に出てこない

→不知火・常若の父親である竜神は、台本には一切登場しない

### ②コロスが登場する

→「憂き世の苦志も無心となりて上天せし魂屍たち」がコロスとして登場。  
隠亡の駒の分身として活躍する

### ③常若の登場順が変更されている

→原作では常若が冒頭から出てくるが、台本では不知火の狂乱の場面後から登場する

## 【不知火の人物設定】

### ・使命① 火を灯す

→「己が生身を焚いて（中略）海霊の宮の本殿にみ灯りを点せよ」という命令を菩薩から下される

### ・使命② 海の毒を浚う

→陸の水脈から海底に下ってきた汚染水を、口にも身にもすすぐ。身体に毒が回り、死に際が近づいている

### ・狂乱

→海の汚染を嘆き狂乱するが、菩薩になだめられて落ち着き、常若と再会を果たす

## 【不知火が象徴するもの①】

### ○生命の象徴、希望の灯火

・石牟礼は、親鸞上人の「無明長夜」の考え方に影響を受けている。そのため、不知火は生命の明かりであり、生きていく希望の火であると考えている。

※「無明長夜の燈炬なり 智慧くらしとかなしむな」

（『正像末和讃』より）

→作中の不知火は、海底から生類全体を照らしていた

・また、患者だけでなくあらゆる死者の生命の象徴であるとも語っている

※不知火の命は生類と共にある。生類が衰滅に向かえば、不知火も死ぬ

## 【不知火が象徴するもの②】

### ○繫栄の象徴

▶ 不知火は夜光虫を身にまとって登場する

→かつての豊かな不知火海の様子が反映されている

（「<インタビュー>石牟礼道子さんに聞く」より）

▶ 自然現象「不知火」

→昔は出現すると御神酒をあげ三味線・太鼓でにぎわったという。また、不知火のよく出現した年は漁がよいという俗信もあった（『日本大百科全書』より）

## 【不知火の狂乱の様子】

海霊の宮にこもり、かの泉のきはより、  
**悪液となりし海流**に地上のものらを引きこみ、  
雲仙のかたはらの渦の底より煮立てて、  
妖霊どもを道づれに、わが身もろとも  
命の命脈ことごとく枯渇させ、  
生類の世再びなきやう、**海底の業火**とならむ

(石牟礼道子『石牟礼道子全集 不知火』第16巻、藤原書店、  
2013年、17頁 より)

## 【狂乱する理由】

- ・ **海底が汚染され**、魚や藻が成す美しい春秋が見られなくなった。この哀れさを嘆かわしく思ったから
- ・ **「我が身を焚きし火の色」**が、海の汚染によって生じた気候変動により、「天なるおん方」の目に見えなくなったから

## 【不知火の狂乱が表現しているもの】

- ▶ 自らに課された使命に抗おうとする意思
- ▶ 怒りと苦痛によって生じる負のエネルギー
- ▶ 死を以て救済するほかないという残酷な状況

## 【警鐘の作品】

- ▶ 『不知火』は救済・再生・祈りの作品であると評されることが多い。しかし、この能は現代の人々に向けて警鐘を鳴らしているのではないか
- ▶ 祝婚の舞の場面を以て終わるが、ハッピーエンドではない
- ▶ 姉弟が生まれ変わるためには、「人間たちが反省して生き直す力」を持つことが条件
- ▶ →姉弟の運命は人間の行い次第。来世で救われない可能性もある
- ▶ 初演から22年が経過し、更に世の中は変化している。  
私たちは、自身の行動を見つめ直す必要があるのではないか

## 【参考文献】

- ・「作家・石牟礼道子 祈りを能に託して（旬の人 俊のひと）【西部】」（2002年、6月29日付、朝日新聞夕刊、10面より）
- ・「水俣の犠牲、鎮魂へ能奉納 石牟礼さんが新作「不知火」【西部】」（2004年、8月29日付、朝日新聞朝刊、34面より）
- ・石田瑞彦編『日本の名著6 親鸞』1999年、中央公論新社）
- ・石牟礼道子『新作能 不知火』平凡社、2003年  
（※付属DVD「石牟礼道子自作を語る」）
- ・石牟礼道子『石牟礼道子全集 不知火』第16巻、藤原書店、2013年
- ・北原保雄編『日本国語大辞典』第2版、小学館、2003年
- ・中村元『広説佛敎語大辞典』上巻・下巻、東京書籍、2001年
- ・和達清夫『最新 気象の事典』第4版、東京堂出版、2001年
- ・渡邊静夫『日本大百科全書』第12巻、小学館、1994年

ご清聴ありがとうございました。



[フォーラム印象記 (中村 勘太)]

冒頭には学部長による開会挨拶があり、続いて本フォーラムの趣旨の説明があった。「石牟礼道子再検証」と題された今回のフォーラムには、約二五〇人の人々が集まり、会場は殆ど満員であった。

第一部はゲスト二人による講演。詩人の伊藤比呂美氏は、石牟礼の詩について、「死民たちの春」(『朝日ジャーナル』一九七一・一・一五)や詩集『祖さまの草の邑』(思潮社 二〇一四・七)などを挙げつつ、その独自性、或いは他の詩人からの影響について述べる。石牟礼の詩の特性として、アノニマスな声、平易な言葉遣い、ナルシズムといった要素を挙げ、それらの影響元を考察しつつ、そこに回収しきれない「道子味」を論じるその視点は、大変鋭いものであった。これらは現代詩史上における石牟礼の位置を再評価し、詩人としての石牟礼像を解き明かすことを試みるものであった。視点の鋭さとは対照的に、その語りぶりは、軽妙かつ奥行きのあるユーモラスなもので、会場を惹き込み、和やかな雰囲気を形成した。最後は「花を奉る」(『環』二〇一一・七)を朗読し、講演を結んだ。

続いて文学研究者の渡邊英理氏は「『椿の海の記』の世界——石牟礼道子と森崎和江を結びつつ」と題して、『椿の海の記』(『文芸展望』一九七三・四～一九七六・七)の作品世界を『苦海浄土』第一部第三章「ゆき女きき書」(原題「奇病」『サークル村』一九六〇・一)、森崎和江の作品、同時代水俣周辺の状況を参照しつつ論じる。『椿の海の記』の水俣は、『苦海浄土』での描かれ方とは異なり、公害の起こる前の、水俣の原風景とも言える世界であるが、果たしてそこは「ユートピア」であったのか、と問う。問いを起点として、作品世界の内実を分析しつつ、従来の読みを批判・再検証し、新たな石牟礼テキストの読みの可能性を示すものであった。

先ず、「生類」の行き交う「往還道」の在り方から、コモنز(共有地)としての独占不可の市場と「生類たち」との関係や、そこに含まれる再生産の構造を読み解く。次に、家父長制社会における女たちについて、周囲の視線から複数の差別の構造を示しつつ、女たちの家事や再生産労働をケアの文脈で読み取り、その中で女性同士の、或いは夫婦間での連帯に、既存の構造からの解放の可能性を見る。又、『サークル村』同人であった森崎和江のテキストにおける海、海女たちについて、石牟礼のテキストとの親和性を指摘し、森崎のテキストを補助線として石牟礼を読むことがもたらず可能性を示して、講演を結んだ。

休憩を挟んだ後、本学の学部四年生二名によるミニ発表が行われた。一人目の吉田祐紀乃氏は、『十六夜橋』(『いま、人間として』一九八二・六～一九八四・九、『こみち通信』一九八五・六～一九八八・四)における女性登場人物の関係性についての発表を行った。作品での高原家の女たち(お糸一志乃一綾)の位置づけと、そこに重なりつつも独自の輪郭を持つように描かれるお小夜の位置について、本文の記述を参照しつつ、論述した。

二人目の江崎萌氏は、新作能「不知火」の石牟礼による原テキストと舞台台本との相違点について丁寧な調査のもとで確認し、「不知火」の作品内容について発表を

行った。テキストの相違については大小含めて六十ヶ所以上の違いがあり、内容レベルでの相違も多くあったと言う。

十分という大変短い時間での発表であったが、二発表ともに明確な論点と先の展望とが示されており、密度の高い発表であった。これから石牟礼作品を文学的に研究せんとする諸氏の参考になろうと思われる。

休憩を挟んだ後、第二部として伊藤氏と渡邊氏による対談が行われた。講演に対するコメントに回答しつつ、互いの石牟礼観や問題意識についての議論が多くなされた。特に印象に残ったのは、伊藤氏が石牟礼の独特の文体について語る中で、「無色透明さ」への志向と実践によってあの独自の文体が生まれたのではないか、という部分で、石牟礼の詩的言語性を作家としての石牟礼の表現手法という視点から読み解こうとする試みは大変刺激的であった。

フォーラムは予定時刻に閉会した。石牟礼文学の“再検証”の試みは、その場の参加者一人一人の「石牟礼道子」像に変容を促すものでもあっただろう。



〔登壇者集合写真〕



〔当日会場系の学生と共に〕